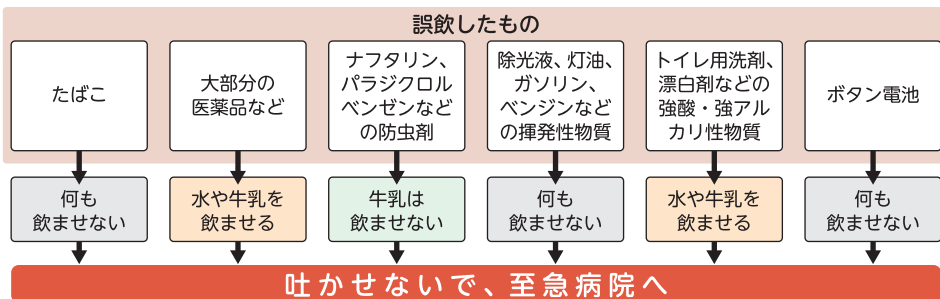


誤飲してしまった場合

子どもが何かを誤飲してしまった時は、何を飲んだか、いつ飲んだか、どれだけの量を飲んだか、などを確認することが必要です。誤飲してしまったものの種類によって対応が違うことがあるので注意しましょう。

< 誤飲してしまった時の対応のポイント >



< 病院へ行く際のチェックポイント >

- ①何を飲んだか
 - ②いつ飲んだか
 - ③どれだけの量を飲んだか
 - ④色が悪いなど、いつもと違うところはないか
 - ⑤けいれんを起こしていないか
 - ⑥意識ははっきりしているか
- などをチェックし、誤飲したものの容器や袋、説明書などを持っていきましょう。

【(公財)日本中毒情報センター 中毒110番】

化学物質(たばこ、家庭用品など)、医薬品、動植物の毒などによる中毒事故が実際に起きて、どう対処したらよいか迷った場合は相談してください。

- ・大阪中毒110番(24時間対応) 072-727-2499
- ・つくば中毒110番(9時～21時対応) 029-852-9999

子どもを事故から守る!プロジェクト

消費者庁は、関係府省庁と連携し、「子どもを事故から守る!」ための様々な取組を推進しています。
http://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_safety/child/

消費庁 子どもを事故から守る!公式ツイッター (@caa_kodomo)

様々な子どもの事故防止に役立つ情報を随時発信しています。
https://twitter.com/caa_kodomo

✉ 子ども安全メールfrom消費者庁

主に0歳から小学校入学前の子どもの思わぬ事故を防ぐため、注意点や豆知識をメール配信しています。お子様の事故を予防するために、是非ご登録ください。
<http://www.caa.go.jp/kodomo/mail/index.php>

消費者庁 リコール情報サイト

製品回収や無償修理等の情報を提供しています。
<http://www.recall.go.jp/>

監修:田中 哲郎氏(医学博士 東京工科大学客員教授)

編集・発行 消費者庁消費者安全課
 東京都千代田区霞が関3-1-1中央合同庁舎第4号館7階
 電話 03-3507-9200



子どもを
事故から
守る!!

事故防止 ハンドブック



アブナイカモ

子どもを事故から守る!プロジェクトシンボルキャラクター アブナイカモ

このハンドブックは、0歳から6歳(小学校に入学前の未就学児)の子どもに、予期せず起こりやすい事故とその予防法、もしもの時の対処法のポイントをまとめたものです。

子どもの周囲の大人たちが、子どもの身の回りの環境にちょっとした注意を払い、対策を立てることで、防げる事故があります。明るく楽しい子育てと、毎日の生活のために、子どもを事故から守る正しい知識を身に付けるお手伝いとなれば幸いです。



子どもの発達と起こりやすい事故

4ページ以降は、各事故について、発生しやすい年齢を右記のマークで記載しています。 **0歳～3歳くらい**

子どもは運動機能の発達とともに、いろいろなことができるようになります。その一方で、様々な事故にあうおそれが出てきます。起こりやすい主な事故が、発生しやすい時期の目安を矢印で記載しました。

4ページ以降に起こりやすい事故の注意ポイントを紹介していますので、ご覧いただき事故の予防につなげていきましょう。

発達	誕生	3か月	4か月	5か月	6か月	7か月	8か月	9か月	10か月	11か月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
発達の目安	首すわり 足をバタバタさせる			口の中に物を入れる 見た物に手を出す 寝返りをうつ 離乳食を始める		座る	ハイハイをする		つかまり立ちをする 物をつかむ		一人歩きをする 走る・登る スイッチ等をいじる 幼児食を始める		階段を登り降りする 高い所へ登れる			
窒息・誤飲事故	就寝時の窒息事故 うつぶせで寝て、顔がやわらかい寝具に埋もれる 掛布団、ベッド上の衣類、ぬいぐるみ、よだれかけで窒息				ベッドと壁の隙間などに挟まれる 家族の身体の一部で圧迫される ミルクの吐き戻しによる窒息						4ページ					
			ブラインドやカーテンのひもなどによる窒息								4ページ					
			食事中に食べ物で窒息										5ページ		5ページ	
			おもちゃなど小さな物で窒息										5ページ		5ページ	
水まわりの事故					浴槽へ転落し溺れる 洗濯機、バケツや洗面器などによる事故										水まわりの事故は6ページ	
	入浴時に大人が目を離して、溺れる										ビニールプールやプールなどでの事故		海や川での事故		ため池、排水溝、浄化槽での事故	
やけど			お茶、味噌汁、カップ麺などでのやけど 電気ケトル、ポット、炊飯器でのやけど		暖房器具や加湿器でのやけど 調理器具やアイロンでのやけど										やけど事故は7ページ	
													ライターやマッチでの火遊び			
起こりやすい主な事故	大人用ベッドからの転落		ベビーベッドやおむつ替え時の台からの転落								8ページ					
			椅子やソファからの転落								8ページ					
					階段からの転落、段差での転倒						8ページ					
	抱っこひも使用時の転落										ベランダなどからの転落		窓や出窓からの転落		8ページ	
	ベビーカーからの転落										9ページ					
自動車・自転車	チャイルドシート未使用による事故		車のドアやパワーウィンドに挟まれる事故										10ページ		10ページ	
	車内での熱中症										10ページ					
					子ども乗せ自転車での転倒								道路上などでの事故		10ページ	
挟む・切る・その他の事故					テーブルなどの家具で打撲										11ページ	
													自転車に乗せた子どもの足が後輪に巻き込まれる、スポーク外傷		11ページ	
					キッチン付近で包丁、ナイフ カミソリ、カッター、はさみ 小さな物を鼻や耳に入れる		でげが などの刃物やおもちゃでのけが				12ページ				12ページ	
											12ページ					
											ドアや窓で手や指を挟む タンスなどの家具を倒して下敷きになる 歯磨き中に歯ブラシでの喉突きなどの事故		12ページ		12ページ	
エスカレーター、エレベーターでの事故												13ページ		13ページ		
												機械式立体駐車場での挟まれ事故		13ページ		
												ドラム式洗濯機での事故		13ページ		

就寝時の窒息事故

0歳～1歳くらい

うつぶせで寝て、顔がやわらかい寝具に埋もれる

< 注意ポイント >

1. 大人用ベッドではなく、できるだけベビーベッドに寝かせ、敷布団やマットレス等の寝具は硬めのものを使用しましょう。
2. 1歳になるまでは、寝かせる時は、あお向けに寝かせましょう。



掛布団、ベッド上の衣類、ぬいぐるみ、よだれかけで窒息

< 注意ポイント >

1. 掛布団は、子どもが払いのけられる軽いものを使用し、顔にかぶらないようにしましょう。
2. 寝ている子どもの顔の近くに、口や鼻を覆ったり、首に巻き付いたりする物は置かないようにしましょう。



ベッドと壁の隙間などに挟まれる

< 注意ポイント >

1. 寝ている間に動き回りベッドと壁の隙間に頭や顔が挟まるなどしないよう、寝室には隙間をなくしましょう。
2. 大人用ベッドではなく、できるだけベビーベッドに寝かせましょう。



家族の身体の一部で圧迫される

< 注意ポイント >

1. 寝かす時に、添い寝をして意図せず寝込んでしまい、身体の一部で圧迫してしまわないよう注意しましょう。
2. 大人用ベッドではなく、できるだけベビーベッドに寝かせましょう。



ミルクの吐き戻しによる窒息

< 注意ポイント >

1. 授乳した後は、げっぷをさせてから寝かせるようにしましょう。
2. げっぷが十分に出ない時は、寝かせて10～15分ほどはミルクを吐かないか様子を見ましょう。



ブラインドやカーテンのひもなどによる窒息

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. ひもが首に絡まらないよう、ひもは、子どもの手が届かない所にまとめましょう。
2. ソファなど、踏み台になる物を、ひもの近くに設置しないようにしましょう。
3. ひも部分がないなどの安全性の高い商品を選びましょう。



食事中に食べ物で窒息

0歳～6歳くらい

< 注意ポイント >

1. 食べ物は小さく切り、食べやすい大きさにしてから与え、よく噛んで食べさせましょう。
2. 飴などの喉に詰まりやすい食品は特に大きさに注意しましょう。
3. 気管支に入りやすい硬い豆・ナッツ類は、3歳頃までは食べさせないようにしましょう。
4. 食品を口に入れたまま遊んだり、話したり、寝転んだりしたまま食事したりさせないようにしましょう。



おもちゃなど小さな物で窒息

0歳～3歳くらい

< 注意ポイント >

1. おもちゃの小さな部品やスーパーボールなどは、子どもの手の届かない所に保管し、遊ぶ時は、口に入れないよう徹底して注意しましょう。
2. おもちゃの購入時や利用時は、商品の対象年齢に注意しましょう。



ボタン電池、吸水ボール、磁石などの誤飲

0歳～3歳くらい

< 注意ポイント >

1. ボタン電池の誤飲は、食道に詰まったり胃の中にとどまったりすると重症事故につながります。
2. 樹脂製の吸水ボールの誤飲により、腸閉塞などを起こすことがあります。
3. 複数の磁石の誤飲は、磁石が腸壁を挟んでくっつき腸閉塞などを起こすおそれがあります。これらの物は子どもの手の届かない、見えないところに保管しましょう。



医薬品、洗剤、化粧品などの誤飲

0歳～3歳くらい

< 注意ポイント >

1. 医薬品や洗剤などの誤飲は、重大な症状を引き起こすおそれがあります。
2. 医薬品、食品と見た目が似ている洗剤や化粧品、入浴剤などは、子どもの目に触れない場所や、手の届かない場所に保管しましょう。



たばこ、お酒などの誤飲

0歳～3歳くらい

< 注意ポイント >

1. たばこやお酒の誤飲は、ひどい中毒症状が出る場合があります。
2. たばこやお酒は、子どもの目に触れない場所や、手の届かない場所に保管しましょう。また、シールや包装資材の誤飲にも注意しましょう。



トピックス

乳幼児突然死症候群 (SIDS) について

SIDS:Sudden Infant Death Syndromeとは、それまで元気だった赤ちゃんが、睡眠中に突然死亡してしまう病気、窒息などの事故とは異なります。

原因が分からない病気、予防方法は確立していませんが、厚生労働省によると、以下の3点に気を付けることで発症リスクの低減が期待されています。

- ①1歳になるまでは、寝かせる時はあお向けに寝かせましょう。 ②できるだけ母乳で育てましょう。 ③たばこをやめましょう。

浴槽へ転落し溺れる

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 子どもが浴室に入ってしまう、浴槽をのぞき込み転落し、溺れることがあります。
2. 入浴後は、浴槽の水を抜き、浴室には外鍵を付けて子どもが入れないようにしましょう。



入浴時に大人が目を離して、溺れる

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 大人が洗髪している時や、着替えを取りに行ったり、電話に出たりしている時など、目を離れた間に溺れてしまうことがあります。
2. 大人が洗髪中は、子どもを浴槽から出しましょう。
3. 少しの間でも子どもから目を離さないようにしましょう。



洗濯機、バケツや洗面器などによる事故

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. バケツや洗濯機などにたまったわずか10cmの深さの水でも溺れるおそれがあります。
2. 使用後の洗濯機から、水を必ず抜いておきましょう。
3. バケツや洗面器の水の量が少なくても、近くに子どもを1人にしないように注意しましょう。



ビニールプールやプールでの事故

1歳以上

< 注意ポイント >

1. 大人が少しの間、目を離れた時に、子どもが溺れてしまうことがあります。
2. プールで遊ぶ時は、必ず大人が付き添い、子どもから目を離さないようにしましょう。



海や川での事故

2歳以上

< 注意ポイント >

1. 子どもだけで海や川などで遊ぶことがないように注意しましょう。
2. 遊ぶ時はライフジャケットを着用させ、必ず大人が付き添うようにしましょう。
3. 転落したり、溺れたりする危険がある場所がないか確認し、危険な場所で子どもが遊ばないように注意しましょう。



ため池、排水溝、浄化槽での事故

2歳以上

< 注意ポイント >

1. ため池、排水溝、浄化槽など、転落したり溺れたりする危険な場所がないか確認しましょう。
2. 危険な場所で、子どもが遊ばないように注意しましょう。



お茶、味噌汁、カップ麺などでのやけど

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 高温の飲み物や汁物を扱う時は、子どもの手が届かないよう注意しましょう。
2. テーブルクロスやテーブルマットは、子どもが引っ張って、その上に載った容器を倒す原因になりやすいので使わないようにしましょう。



電気ケトル、ポット、炊飯器でのやけど

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 電気ケトルなどにつかまり立ちをしたり、コードを引っ張ったりして倒してしまい、熱湯を浴びてやけどをすることがあります。
2. 電気ケトルやポットはお湯が出ないように必ずロックし、子どもの手の届かない場所に置きましょう。
3. 炊飯器から出る蒸気に触れてやけどをすることがあるので、注意しましょう。

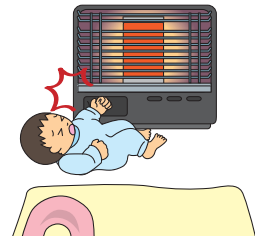


暖房器具や加湿器でのやけど

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 床に置くタイプの暖房器具は、子どもの手が届かないよう安全柵などで囲みましょう。
2. 湯たんぽや電気カーペットなどは、長時間皮膚が同じ場所に触れて低温やけどをすることがあるので、長時間使用しないようにしましょう。
3. 加湿器から出る蒸気に触れたり、加湿器を倒して熱湯を浴びたりしてやけどをすることがあります。加湿器の使用時は、ベビーゲートを活用して、子どもに触れさせないようにしましょう。



調理器具や

0歳～2歳くらい

アイロンでのやけど

< 注意ポイント >

1. フライパンやなべなどの調理器具は、調理中だけでなく調理後も高温のことがあるので、子どもに触れさせないように注意しましょう。
2. アイロンをテーブルや机の端に置いたり、アイロンのコードが子どもの手に届かないようにしましょう。



ライターやマッチでの火遊び

2歳～6歳くらい

< 注意ポイント >

1. ライター等を使用した火遊びによる火災事故防止のため、ライターやマッチは子どもの目に触れない場所に保管しましょう。
2. 子どもが操作できないような幼児対策（チャイルドレジスタンス）機能が施された、PSCマーク（※11ページのトピックス参照）付きのライターを使用しましょう。



転落・転倒事故

大人用ベッドからの転落

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. 子どもは寝ている間も寝返りをしたり、動きまわったりして、ベッドから転落し、頭部などにけがをすることがあるので注意しましょう。
2. 寝かすつける時に、添い寝をすることは多いと思いますが、2歳になるまでは、できるだけベビーベッドで寝かせましょう。



ベビーベッドやおむつ替え時の台からの転落

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. ベビーベッドを使用する時は、常に柵を上げて使用しましょう。
2. ベビーベッドやソファ、施設にあるおむつ交換台などの高さのある場所でおむつ替えをする時は、子どもから目を離さないようにしましょう。



椅子やソファからの転落

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. 椅子や子ども用ハイチェアの上で立ち上がったり、座ってテーブルを蹴ったりさせないようにしましょう。
2. ハイチェアの安全ベルトは、必ず締めましょう。
3. 椅子で遊ばせないようにしましょう。
4. ソファの上に寝かせて、寝返りをして転落しないように注意しましょう。

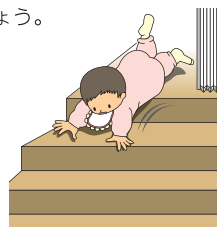


階段から転落、段差での転倒

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. ハイハイをする頃から、階段からの転落が起きるので注意しましょう。
2. 転落防止の柵を付けて、閉め忘れのないようにし、子どもが開けられないようにロックを掛けましょう。
3. 玄関の段差での転倒や、その他につまづきやすい段差がないか注意しましょう。



ベランダなどからの転落

1歳以上

< 注意ポイント >

1. 子どもだけでベランダに出さないよう注意しましょう。
2. ベランダから身を乗り出すと転落する危険があることを教えましょう。
3. ベランダに植木鉢、椅子などの踏み台になるものを置かないように気をつけましょう。
4. 子どもだけを家に残して外出することは避けましょう。



窓や出窓からの転落

1歳以上

< 注意ポイント >

1. 窓から転落する危険があることを教えましょう。
2. 窓の近くにベッドやソファなど踏み台になるものは置かないようにしましょう。
3. 網戸に寄りかかると、網戸が破れて転落するおそれがあるのでやめるよう教えましょう。



抱っこひも使用時の転落

0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. 抱っこひもの使用時に、物を拾うなどで、前にかがむ際は、必ず子どもを手で支えましょう。
2. おんぶや抱っこをする時や、降ろす時は、低い姿勢で行いましょう。
3. バックル類の留め具や、ベルトのゆるみ、子どもの位置など、取扱説明書を読んで、正しく使用しましょう。



ベビーカーからの転落

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. ベルトは必ず、正しくしっかりと締めましょう。
2. 段差に引っ掛かったり、重い荷物をぶら下げていることでバランスを崩し転倒することがあるので、注意しましょう。
3. ベビーカーで電車やバスに乗る時は、周囲の状況に注意し安全を確認しましょう。



ショッピングカートからの転落

1歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. ショッピングカートに子どもを立たせたり、ショッピングカートで遊ばせたりしないようにしましょう。
2. ショッピングカートの幼児用座席以外に子どもを乗せないようにしましょう。
3. 注意表示等をよく確認して、安全に使用しましょう。



遊具（すべり台、ジャングルジム、ブランコなど）からの転落

2歳以上

< 注意ポイント >

1. 施設や遊具の対象年齢を守って、遊ばせましょう。
2. 6歳以下の子どもは、大人が付き添い、目を離さないように注意しましょう。
3. 服のひもなどが首に絡まるおそれがあるので、服装やかばんなどの持ち物に注意しましょう。
4. それぞれの遊具の正しい使い方を教えましょう。
5. それぞれの遊具の使い方を守らせ、ふざけて他の子どもを突き飛ばさせないように教えましょう。



ペダルなし二輪遊具、キックスケーター等で転倒

2歳以上

< 注意ポイント >

1. 子どもが足で蹴って進むペダルなし二輪遊具や、キックスケーターは、道路交通法上、道路では使用できません。
2. 必ずヘルメットを着用させて遊ばせ、正しい乗り方を教えましょう。
3. 2～3歳頃から使用できるペダルなし二輪遊具に乗る時は、転倒しないよう、目を離さないようにしましょう。



自動車・自転車関連の事故

チャイルドシート未使用による事故 0歳～6歳くらい

< 注意ポイント >

1. 車に子どもを抱きかかえたまま乗ると、衝突や急停車の際に、支えきれずに子どもが腕から飛び出し、危険です。
2. 短時間の乗車であっても、チャイルドシートを使用しましょう。
3. 6歳になるまでは、必ずチャイルドシートを使用しましょう。
4. チャイルドシートは取扱説明書をよく読んで、後部座席にしっかり取り付け、正しく使用しましょう。



車のドアやパワーウィンドに挟まれる事故 0歳～3歳くらい

< 注意ポイント >

1. 車のドアやパワーウィンドを閉める時は、子どもの顔や手が出ていないか確認し、閉める前に一声かけましょう。
2. 子どもが自分で開閉操作ができないように、ロック機能を活用しましょう。



車内での熱中症 0歳～1歳くらい

< 注意ポイント >

1. 子どもを車内に残したままにしていると、特に暑い季節は、車内の温度が上昇し、熱中症になるおそれがあります。
2. 少しの間でも、子どもだけを車の中に残しておかないようにしましょう。



道路上などでの事故 1歳以上

< 注意ポイント >

1. 子どもと歩く時は、手をつなぎ、白線の内側を歩きましょう。また、歩道を歩くときは、大人が車道側を歩くようにしましょう。



3. 道路越しに子どもに声を掛けると、飛び出しの危険があるので、声を掛けないようにしましょう。



2. 道路に飛び出しをしないことなど、交通事故の危険や交通ルールについて教えましょう。



4. 道路上や道路の近くでは遊ばせないようにしましょう。



子ども乗せ自転車での転倒 0歳～5歳くらい

< 注意ポイント >

1. 法令により子どもを乗せることは、6歳未満で、幼児用座席を設置した場合にのみ認められています。
2. 走行中に転倒したり、大人が降りて子どもだけを乗せたまま停車中に転倒したりすることがあります。乗せる時は、必ずシートベルトを使用し、ヘルメットを着用させましょう。
3. 子どもを乗せたまま自転車を離れないようにしましょう。
4. 子どもを乗せる時は、転倒防止のため、「乗せる時は、後部座席から前部座席」、「降ろす時は、前部座席から後部座席」の順番を守りましょう。
5. 抱っこひもやおんぶひもで子どもをおんぶしたまま走行する際も、運転には十分注意しましょう。
6. 自転車や幼児用座席に不具合がないか、定期的にチェックしましょう。



自転車に乗せた子どもの足が後輪に巻き込まれる、スポーク外傷 3歳以上

< 注意ポイント >

1. 法令により子どもを乗せることは、6歳未満で、幼児用座席を設置した場合にのみ認められています。
2. 幼児用座席を使用し、座席ベルトやヘルメットを着用させましょう。
3. 後輪へのスカート等の巻き込みを防止するドレスガードを設置すると足の巻き込み防止に有効です。



トピックス

安全な製品を選び、取扱説明書をよく読んで使用しましょう。

子どもが使う製品は、対象の月齢や年齢に合ったものを選び、取扱説明書や使用上の注意をよく読んで、正しく使用しましょう。また、安全に配慮された製品には様々なマークが付いたものがあります。マークの意味を知って、製品選びに役立てましょう。



PSCマークは**Product**（製品）、**Safety**（安全）、**Consumer**（消費者）を表し、国の定めた技術基準に適合した製品に付いています。対象製品には、製造又は輸入業者に国の安全基準に適合しているかどうかの自己確認が義務付けられている「特定製品」と、その中で更に第三者機関の検査が義務付けられている「特別特定製品」があります。特別特定製品には乳幼児用ベッドやライターも政令指定されています。



SGマークは、**Safe Goods**（安全な製品）を表し、一般財団法人製品安全協会が定めた安全基準に適合していることを示すマークです。万が一、**SG**マーク付き製品に欠陥があり、それを原因として人身損害が起きた場合、対人損害を賠償する制度も付加されています。**SG**マークの表示対象の子ども向け製品には、ベビーカー、すべり台、乳幼児用ベッド、抱っこひも、幼児用ベッドガードなどがあります。



STマークは、14歳以下の子ども向け玩具に付けられるマークで、「安全面について注意深く作られたおもちゃ」として玩具業界が推奨するものです。一般社団法人日本玩具協会が策定した玩具安全（**ST**）基準に適合している玩具には**ST**マークが表示されています。また、**ST**マーク付きの玩具には、対象年齢が記載されています。対象年齢が低い玩具は、喉に詰まらない大きさである、部品が外れにくい、尖った部分がない等、安全性をより配慮した設計になっています。

挟む・切る・その他の事故

キッチン付近で包丁、ナイフでけが

0歳～2歳くらい



< 注意ポイント >

1. まな板に置いた包丁など、刃物を使用したらすぐに収納場所に片付けましょう。
2. 収納場所の扉や引き出しにはチャイルドロックを付けるなどの工夫をしましょう。
3. キッチンには危険なものがたくさんあるので、ベビーゲートなどで子どもを入れないようにしましょう。

カミソリ、カッター、はさみなどの刃物やおもちゃでのけが

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. 洗面台や風呂場にあるカミソリは使用したら、すぐに子どもの手の届かない所に保管しましょう。
2. 大人や兄姉が文房具として使用するカッターやはさみも同様にして保管しましょう。



小さな物を鼻や耳に入れる

0歳～2歳くらい

< 注意ポイント >

1. ビーズやプラスチックの玉、小さなおもちゃ部品やお菓子などを鼻や耳の穴に入れて遊ぶことがあります。
2. 異物が詰まって思わぬ事故になるおそれがあるので、小さな物を鼻や耳に入れないように注意しましょう。

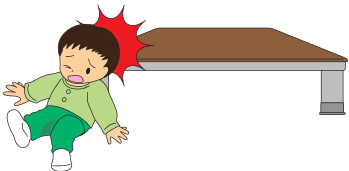


テーブルなどの家具で打撲

0歳～3歳くらい

< 注意ポイント >

1. 転倒してテーブルなどの家具の角に顔や頭をぶつけて、けがをすることがあります。
2. 家具類の角には、クッションテープを取り付けるなどして、ぶつかった時の衝撃を和らげる工夫をしましょう。



ドアや窓で手や指を挟む

1歳～3歳くらい

< 注意ポイント >

1. ドアや窓の開閉時には、子どもが近くにいないか確認しましょう。
2. ドアのちょうつがい部分に隙間防止カバーを付けるなどしましょう。
3. ドアや窓は、風で急に閉まることがあるので気を付けましょう。

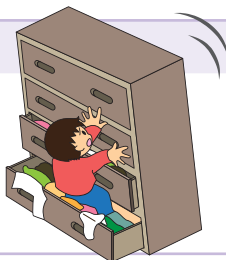


タンスなどの家具を倒して下敷きになる

1歳～6歳くらい

< 注意ポイント >

1. タンスなどの家具にぶら下がったり、引き出しを開けてよじ登ったりして家具が倒れ、下敷きになることがあります。
2. タンスなどの家具は固定し、引き出しや開き扉にはストッパーを付け、家具で遊ばせないようにしましょう。



歯磨き中に歯ブラシでの喉突きなどの事故

1歳～3歳くらい

< 注意ポイント >

1. 歯磨き中は、保護者がそばで見守り、歯ブラシを口にくわえたり、手に持ったまま歩き回ったりさせず、床に座らせて歯磨きをさせましょう。
2. 子ども用歯ブラシは、喉突き防止カバーなどの安全対策を施したものを選びましょう。
3. 保護者が仕上げ磨きをする際は、子ども用歯ブラシはきれいにする効果が不十分なため、仕上げ用歯ブラシを使用しましょう。ただし仕上げ用歯ブラシは、喉突き事故のおそれがあるため、子どもには持たせず、手の届かない場所に保管しましょう。
4. 箸やフォークなど、喉突きの危険性がある日用品も、口に入れたまま歩いたり、走ったりさせないようにしましょう。



ドラム式洗濯機での事故

2歳～6歳くらい

< 注意ポイント >

1. ドラム式洗濯機に子どもが入り、窒息する事故が起きています。
2. ドラム式洗濯機は、未使用時でも、蓋は必ず閉めて、チャイルドロック機能を利用しましょう。
3. チャイルドロック機能がない洗濯機では、蓋にゴムバンドを掛けるなどの工夫をしましょう。



エスカレーター、エレベーターでの事故

0歳～3歳くらい

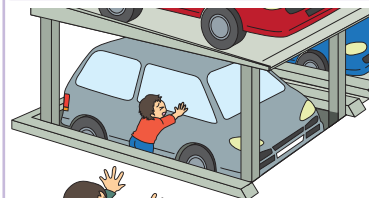
< 注意ポイント >

1. 転倒のおそれがあるので、ベビーカーでエスカレーターの利用は避けましょう。
2. エスカレーターを子どもが利用する際は、必ず大人が手をつなぎ、靴やサンダル、衣類の裾などが挟み込まれないよう、黄色い線の内側に立ちましょう。
3. エレベーターでは、戸袋に手を引き込まれたり、ドアに挟まれたりしないよう注意しましょう。



機械式立体駐車場での挟まれ事故

1歳～6歳くらい



< 注意ポイント >

1. 利用者が駐車装置を操作する機械式立体駐車場で、機械に子どもが挟まれる事故が起きています。
2. 駐車装置を操作中は装置から離れず、子どもが近づかないよう注意しましょう。
3. 子どもには「駐車場では遊ばない」、「装置に触らない」、「機械の中に入らない」などの注意を徹底しましょう。



もしもの時の「応急手当方法」

心肺蘇生法

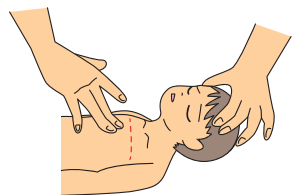
病気やけがにより突然心臓が止まったり、溺れたりした場合、一刻も早い手当てが必要です。人間の脳細胞は数分間血液が流れず酸素が届かなくなると、二度と機能が回復しないからです。119番通報をしてから救急車が来るまでには最低でも数分かかるので、その間の応急措置が命を救います。

< 胸骨圧迫（心臓マッサージ） >

意識がなく呼吸が停止している場合は、直ちに胸骨圧迫による心肺蘇生を開始します。

○**幼児の場合**：胸骨の下半分を、胸の厚さが3分の1くらい沈む強さで、1分間に100回より少し多めのスピードで圧迫します。

○**乳児の場合**：左右の乳頭を結んだ線の中央で少し足側を、指2本で、同じ強さとスピードで圧迫します。



胸骨圧迫（心臓マッサージ）
乳児の場合

< 気道確保・人工呼吸 >

胸骨圧迫した後に、気道確保して人工呼吸を2回します。その後、救急隊に引き渡すまで、胸骨圧迫30回と人工呼吸2回を繰り返します。あお向けにして、頭を後ろに反らし、同時に顎の先を上を持ち上げるようにすると、気道が開きます。

○**幼児の場合**：鼻をつまみ、口と口をくっつけて息を吹き込みます。

○**乳児の場合**：口と鼻を一緒に覆い、強くなりすぎないように息を吹き込みます。

AED（自動体外式除細動器）

AEDは、心臓に電気的な刺激を与えて正常のリズムを取り戻す機械です。近くにAEDがあれば取り寄せを依頼し、届いたら機械に表示されているように電極を張り、その音声に従って操作します。効果がなければ胸骨圧迫30回、人工呼吸2回を繰り返し、以後2分おきにAEDを操作します。

やけどをしてしまった時

やけどをしてしまったら、すぐに水道水やシャワーなどの流水で15分～30分程度、やけどした部分を直接又は服を脱がさず服の上から冷やしましょう。

○**やけどの範囲が片足、片腕以上の広範囲にわたる場合**：
救急車を呼ぶか、至急病院で受診しましょう。

○**やけどの範囲が手のひら以上の大きさの場合や水膨れの場合**：
潰さないようにして、病院で受診しましょう。

なお、市販の冷却シートは、やけどの手当てには使えません。電気カーペットなどによる低温やけどは、見た目より重症の場合がありますので、症状が悪化したり、子どもが痛がるが続いたりなどした場合には病院で受診しましょう。



異物を飲み込み喉に詰まってしまった時

119番通報を誰かに頼み、直ちに以下の方法で詰まった物の除去を試みます。

< 背部叩打法（はいぶこうだほう） >

乳幼児では、口の中に指を入れずに、乳児は片腕にうつぶせに乗せ顔を支えて（図1）、また、少し大きい子は立て膝で太ももがうつぶせにした子どものみぞおちを圧迫するようにして（図2）、どちらも頭を低くして、背中の中を平手で何度も連続して叩きます。なお、腹部臓器を傷付けないよう力を加減します。



図1：背部叩打法
（乳児）



図2：背部叩打法変法
（少し大きい子）

< 腹部突き上げ法（ふくぶつきあげほう） >

年長児は、後ろから両腕を回し、みぞおちの下で片方の手を握り拳にして、腹部を上方へ圧迫します（図3）。

この方法が行えない場合、横向きに寝かせて、又は、座って前かがみにして背部叩打法を試みます。



図3：
腹部突き上げ法
（年長児）

打撲をしてしまった時

○頭の打撲の場合：

- ・傷口から出血している時は、傷口を閉じるようにガーゼで圧迫し、安静にして様子を見ましょう。
- ・意識がない、出血がひどい、繰り返し嘔吐があるときには、救急車を呼ぶか、至急病院で受診しましょう。
- ・顔色が悪く元気がないときは、小児科や脳外科を受診しましょう。意識があって元気なときでも、1日～2日は安静にして様子を見ます。
- ・こぶができた程度なら、安静にして冷たいタオル等で冷やします。



○身体の打撲の場合：

- ・腕や足などを打った時は、冷たいタオルなどで冷やします。
- ・おなかを強く打った時は、衣類を緩めて、安静にして、病院で受診しましょう。

○腕や足の骨折や脱臼の可能性のある場合：

- ・添え木などで固定し、その部分を動かさないようにして、病院で受診しましょう。



出血した時

傷の処置で大事なのは止血です。まずは水で傷を洗います。これは感染防止にもなります。傷口の深さと大きさを確認してガーゼを当てて止血します。それでも血が止まらず、出血がひどい時は、止血しながら病院で受診しましょう。